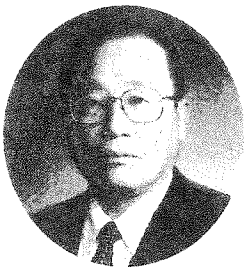

発刊に当たって

学校長（第20代）　石　嶺　正　一

我が県立芦屋高等学校が創立60周年を迎え、ここに「芦高六十年史」を発刊できますことは、誠に大きな喜びであります。今日までの輝かしい歴史と伝統を築いてこられた歴代の学校長をはじめ教職員の方々に深く感謝申し上げるとともに、本校を支えてくださったＰＴＡをはじめ同窓会の各位、更には、この間何かとご指導ご援助をいただいた県当局はもとより、県・市教育委員会関係各位、地域社会の皆様方に衷心より感謝申し上げます。

「芦高五十年史」発刊以降、本校にとって忘れられないことは、平成７年１月17日の阪神・淡路大震災で本校生３名の尊い命が奪われたことと中館・南館校舎の改築を余儀なくされたことであります。当時の学校長を中心とする「芦高」関係者の想像を絶する奮闘振りに心から敬意を表する次第です。震災１年後に『復興をめざして―県立芦屋高校震災の記録―』が発刊されましたが、この度の記念誌にも大幅な紙面を割いて記録を残すこととしております。

さて、今日ある私たちは、過去幾多の苦難を乗り越えた歴史を振り返り、今一度、創業の精神を鑑みることが大切なことと思います。

本校の前身である県立芦屋中学校は、太平洋戦争勃発の前年の昭和15年４月に、地域住民の熱い願いが実り創立されました。

当時、人口５万余を有した精道村は、阪神間有数の高級住宅地として発展を続け、これまでの通称をそのままに芦屋市として市制を布こうとしておりました。地域をあげて新しい中学校の建設に取り組まれ、学校用地も予定されていましたが、国内外の情勢によりその願いを達成することは出来ませんでした。従って「芦中」の第一歩は、武庫郡精道村岩園尋常高等小学校の一部を仮校舎とするものでした。以来、打出の第五国民学校、宮川国民学校、更には本山第一・第二国民学校等々を仮校舎とする生活が続き、現在の地に独立校舎が持てたのは昭和22年10月14日のことで、何と８年間の仮住いが続いた訳であります。その間、戦争・空襲・敗戦と続きました。戦後いち早く戦時色を拭い去るため、学校運営の民主化を打ち出すなど新しい教育活動へ踏み出しております。その一つに、戦時中の「報国団」に代わる「校友会」の復活となって現れ、今日の部活動として受け継がれていますが、当時の学校の基本方針は、文化部、運動部という大きな枠だけを示し、生徒自体の自主的な組織活動にまかせるというものでありました。今日の教育綱領「自治・自由・創造」による活発な自治会活動をはじめ、文武両道の精神を育んだ自由闊達な校風を築き上げた原点であると思っております。本校の最も誇りとするところであります。この良き伝統を継承・発展させるとともに、さらに学校の秩序と規律をより確固たるものにすることが何よりも重要であると考えております。

創立60年を経た今日、21世紀を展望した教育改革が国を挙げて進行中であります。平成12年度から新学習指導要領の移行措置がスタートし、各学校の創意工夫を生かした特色ある教育活動が求められています。兵庫県でも、全国的な改革の流れと相まって、平成12年２月に「県立高等学校教育改革第一次実施計画」が発表され、全日制普通科高校の個性化・特色化をはじめ、少子化に伴う学校の発展的統合や学区の見直しなどが計画されております。

本校におきましても、この60周年を機に、地域性や生徒の実態等を踏まえ、長い歴史と伝統を生かした特色ある学校づくりを目指し、名門「芦高」の復活を祈念し、教職員、生徒一丸となって邁進する所存であります。

おわりに、「芦高六十年史」の編纂に携わっていただいた委員の皆様をはじめ、執筆いただいた皆様方に厚くお礼申し上げ、発刊のことばと致します。